

広島大学教育学部における教員免許ポートフォリオと

「教職実践演習」の教育的効果の検証と改善

研究代表者 間瀬 茂夫（国語文化教育学講座）

研究分担者 竹下 俊治（自然システム教育学講座）

山崎 敬人（初等カリキュラム開発講座）

草原 和博（社会認識教育学講座）

森田 愛子（心理学講座）

吉田 成章（教育学講座）

I 研究の背景と目的

1. 背景

広島大学は、平成 22 年度から教員免許ポートフォリオ・システムを立ち上げ、その 3 年後に実施される「教職実践演習」に向けての準備と学習記録の蓄積をはじめ、今年度で 7 年度目を迎える。平成 25 年度には「教職実践演習」がはじめて実施され、今回で 3 回目の実施となる。両者は、教員養成における質保証という同じ目的のために行われているものであるが、その相互の関連性や効果については、これまで十分な分析と検証が行われていない。本プロジェクトの目的は、これらの教員養成カリキュラムと方法の教育的効果を分析し検証するとともに、将来に向けての改善方法を検討することである。

2. 目的

前項の目的を達成するために、次のような研究を実施することを計画した。

- 1) 本学における教員免許ポートフォリオの成果と課題を明らかにする。
- 2) 本学における「教職実践演習」の授業の実態の分析から、成果と課題を明らかにする。
- 3) 他大学における「教職実践演習」と、それにむけてのポートフォリオ評価の取り組みについて、調査を行い、その特徴を明らかにする。
- 4) 以上をふまえた教員免許ポートフォリオおよび「教職実践演習」の改善の方向性を明らかにする。

II 教員免許ポートフォリオと教職実践演習の制度的検討

1. 検討の柱と計画

教員免許ポートフォリオおよび教職実践演習の改善に向けて、次のような柱を立てて以後の検討を行うことにした。

A 教職実践演習の改善について

- 1) 第 1 回から第 6 回（教育・心理学部分）のカリキュラム改善
- 2) 第 7 回から第 14 回（教科担当部分）のカリキュラム改善

B ポートフォリオの改善について

- 1) 「ふりかえり」およびレベル判定について
 - 2) 評価材の蓄積について
 - 3) システムについて
- C これまでの取り組みの検証方法について（プロジェクトの研究計画）
- 1) 学内「教職実践演習」情報交換会
 - 2) 学外「教職実践演習」発表会
 - 3) ふりかえりとレベル判定、「教職実践演習」の授業内容の有効性の検証
- D 教育実習との連動
- 1) 実習時のポートフォリオの活用
 - 2) 実習授業の「教職実践演習」での活用

2. 教員免許ポートフォリオおよび教職実践演習の成果と課題のまとめ

(1) 教員免許ポートフォリオの成果

- ①評価規準の明示化 「広大教員免許スタンダード8規準」および規準ごとのルーブリックにより、免許取得のための評価規準を明示化することができた。
- ②教員免許ポートフォリオ・システムの構築と稼働 4年間の経過を蓄積し、記録するためのもみじ上のウェブ・システムと、それを運用するための評価材一覧等を含めた約束事のシステム（教員免許ポートフォリオ・システム）を作り上げたこと。また、それが現在まで稼働していることは大きな成果である。
- ③蓄積機能の充実 教員免許ポートフォリオ・システムが果たしている実質的な機能の第一は、蓄積機能である。容量も確保されており、多くの情報を蓄積することができる。
- ④チェック機能 チェック機能は、2年時から卒業時まで、評価材をアップロードしているかどうかによって、免許を取得するうえでの学習規律の維持や学習課題の遂行に寄与しているものと思われる。
- ⑤閲覧機能の確保 閲覧機能については、手順を踏めば、評価材の中身を学生も教員も閲覧することができる。

(2) 教員免許ポートフォリオの問題と課題

- ①ポートフォリオ評価の不成立 大きく言えば、教員免許ポートフォリオが、本来のポートフォリオ評価としての機能を果たしていないことが最大の課題である。ポートフォリオを活用する機会があまりなく、教員免許ポートフォリオの役割が蓄積機能とチェック機能に著しく偏っている。
- ②ウェブ・システムの使いにくさ その原因の一つは、ウェブ・システムにあることは確かである。ウェブ・システムにおいて蓄積された評価材を閲覧するには、いくつかの手順を踏まなくてはならず、使用しにくい。また、評価材についてはファイルのダウンロード、レベル判定についてはウィンドウ表示、教員のレベル判定はウィンドウ表示で学生の自己評価によるレベル判定は紙媒体からPDFファイルと、対照させるべき情報が全て分かれています、一覧性に欠ける。
- ③実物ポートフォリオの欠落 しかし、ウェブ・システム以外の原因の方が実は大きい。教員免許ポートフォリオ・システムが、実物によるポートフォリオの作成を前提にしていないことは問題である。実物ポートフォリオがないことは、学生と教員がポートフォリオ

を媒介にその場でコミュニケーションする機会を設定しにくくしているほか、学生自身のふりかえりを形式的なものにしている可能性がある。

④ポートフォリオの活用機会の喪失 授業や教育実習など教員免許を取得するためのカリキュラムの中で、ともすれば「教職実践演習」においても、ポートフォリオを活用する機会がほとんど設定されていないことが最も解決すべき問題である。このことは、ポートフォリオ評価という教育方法に対する誤った理解を学生に植え付けている可能性もある。

(間瀬茂夫*・竹下俊治・山崎敬人・草原和博・森田愛子・吉田成章)

Ⅲ 教員免許ポートフォリオと教職実践演習の事例的検討

1. 本学における各教科での取り組みの検討

(1)「教職実践演習」に関する学内情報交換会の開催

次のような日程およびプログラムで情報交換会を開催した。

2015年9月24日(木) 15:30~17:00

第1部 各教科・コースにおける授業の進め方

1) 理科・美術科・音楽科・初等コースからの報告

理科 竹下俊治 先生

美術科 三根和浪 先生

音楽科 伊藤 真 先生

初等コース 山崎敬人 先生

2) 質疑応答・情報交換

第2部 教員免許ポートフォリオについて

1)「教職実践演習」W.G.における検討の経過報告

2) 協議

(2) 各教科の取り組み

各教科の取り組みはおよそ次の通りである。

理科...学生の高校での履修、大学でのカリキュラムの実態をふまえ、物理・化学・地学・生物の全領域を学習。授業展開は、領域により異なる部分はあるが、領域ごとの学習+指導案+模擬授業が基本。

美術...授業展開は、指導案+模擬授業+領域ごとの学習。学生は、指導案よりパフォーマンスへの指導を求める。

音楽...授業展開は、教育実習のビデオ映像による振り返り+必須の歌唱教材の指導案の作成。

初等...コース内で委員会を作って、実行。基準6の学級経営に関する学習が不十分という実態から、実践演習の中で補充。基準1~4はセットで、国語と小学校外国語、図工と体育、社会と家庭、算数と理科、生活と音楽をセットでフォローアップ。

国語...教育実習でやったことを振り返り、改善することがテーマ。授業展開は、教材の再分析+実践記録の調査+指導案の改善。

協議を通して、教職実践演習の類型として、次のようなものが見出された。

A 教育実習の振り返り・改善

- B 未学習の必須事項の補充
- C 指導案の作成
- D 模擬授業の実施

問題点としては、次のような点が確認された。

- ・1月の卒論提出直前の学生の負担の問題と、特に他学部生は全体的なモチベーションの問題がある。
- ・ポートフォリオ、リフレクション、指導案や模擬授業等の学習が繋がらない。

(3) 教員免許ポートフォリオについて

教員免許ポートフォリオについては、W.G.から前節のような内容の検討の経過報告を報告した後、参加者間で協議を行った。協議の中では、次のような意見が出された。

- ・オリジナルのものがあるのに、電子化することが手間だという問題をどう解決するか。
- ・規準ごとに評価材の登録をまとめれば、授業ごとの課題の設定の手間は減るが、元のコンセプトが薄れる。
- ・レベル判定は、学生にとって積極的な意味や意義のあることか。
- ・ポートフォリオの実質化が必要。現状評価材や振り返りをアップすることの意味があるか。
- ・何でアップしないといけないのかは、評価のためと明言し、わりきって納得させている。
- ・はじめは教科らしいものを評価材として設定していたが、有効に活用できず、負担ばかりとなった。
- ・前の学年での授業の成績評価が、低いまま残っていて、その後がないことが問題。
- ・現状のポートフォリオが振り返りたいものになっているか。
- ・学生が意義を感じることができるものならば、負担があっても取り組むのではないか。
こうした検討と意見をふまえ、来年度・再来年度での改革に向けて次のような方向性をまとめた。
- ・3年度目をむかえ、初年度の緊張感はなく、ポートフォリオだけでなく、教職実践演習自体の形骸化が進んではいないか。
- ・他学部の委員の交代も進んでいる。
- ・来年度は、クウォーター制、大学院改組、教職大学院開設など、変動が大きく、教員免許ポートフォリオおよび教職実践演習の大幅な変更は困難。
- ・学部教員の改善への意識の喚起、共有がなければ進められない。
- ・来年度は、現状のシステムの枠組みの中で、できるところをシンプル化するとともに、現2年生が4年次において、実物ポートフォリオをベースにした「教職実践演習」ができるように、教職関係の授業や教育実習のオリエンテーションの中で、実物ポートフォリオを作成し、活用できるような取り組みをめざす。
- ・振り返りのテキスト入力など、システムの改修は、再来年度での実現を目指す。

(間瀬茂夫*・竹下俊治・山崎敬人)

2. 他大学における教員免許ポートフォリオと「教職実践演習」の事例の検討

(1) 教職実践演習検討会の開催

2016年1月には、次のような日程および内容で、「教職実践演習検討会—四年度目に向け何に取り組むか—」を開催した。

日時：平成28年1月23日（土）13：30～16：30

場所：第1会議室

- 内容： 1 広島大学の取り組みにおける成果と課題
2 福井大学の取り組み—教職実践演習を中心に—
福井大学教育地域科学部・准教授 遠藤貴広
3 島根大学の取り組み—ポートフォリオを中心に—
島根大学教育学部・准教授 富安慎吾
4 各大学におけるポートフォリオ・システムの事例
アンザス・インターナショナル株式会社 早川 楽
5 協議

（2）福井大学の取り組み—「教職実践演習」を中心に—

遠藤貴広氏には、福井大学教育地域科学部における「教職実践演習」の取り組みを中心に、報告いただいた。その概要は、おおよそ次のようである。

○福井大学教育地域科学部における教員養成カリキュラムの構造

- 1 全学年が協働して地域の実践コミュニティに 参画しながら省察的に学ぶ。
- 2 教育実習前に多様な実践・臨床経験を保障することにより、1年次から実践を想定した教職の学習を行う。
- 3 実践してきたことの意味を繰り返し問い直す 省察的探究のスパイラルをコア・カリキュラムに位置付ける。
- 4 全学年をまたいだ世代継承サイクルをカリキュラムに埋め込む。

○3つの実践コア科目

①「教育実践研究A」（2008年度～）

- ・教職入門、介護等体験事前・事後学習、教育実習事前・事後学習
- ・「教職実践演習」と共に、1年生から4年生までの学生が異コース異学年でチームを組み、授業づくりや教育実践に関する協働探究を重ねる。
- ・教育実習の他に、附属学校の参観、介護等体験、模擬授業、学習個人誌づくりを含む。

②探求ネットワーク事業（1995年～）

- ・総合学習・特別活動・組織学習の実習として、「学習過程研究（教育実践研究B）」という科目名で開講。
- ・隔週土曜日に地域の児童生徒300名が大学に集合し、長期にわたる総合学習・特別活動を展開。
- ・それを150～200名の学生が異コース異学年の組織で支援。それを大学の授業内で構造化。

③ライフパートナー事業（1994年～）

- ・生徒指導・教育相談の実習として、「学校教育相談研究（教育実践研究C）」という科目名で開講。
- ・県内の不登校・発達障害児200名を教育委員会と連携して大学生が支援。
- ・個別支援の実習。大学の授業内で講義とケースカンファレンスを実施。

○なぜ異コース異学年型クラスター方式か？

- ・異質な人々からなる集団で協働していくことが求められる現代社会。
- ・同コース（教科）・異学年でのタテの関係と、異コース（教科）・同学年でのヨコの関係は従来からあった。さらに学生集団内の異質性を高めるために、異コース（教科）・異学年のナナメの関係が多様に確保し、異質な人々からなる集団で協働して省察的な探究を重ねる構造をより厚くすることを追求。

○ポートフォリオから学習自叙伝の編み直しへ

- ・4年次の「教職実践演習」では、電子ポートフォリオに蓄積されている教職科目のレポートや実践記録や報告書を読み直し、教職課程で学んだことの意味を自分のライフストーリーに位置付け直した学習自叙伝（learning autobiography）の作成とその検討が中心的な課題となっている。
- ・この学習自叙伝は、「学習個人誌」と呼ばれ、異コース（教科）・異学年のチームで検討した上で報告・提出することが、単位取得のための必須条件になっている。
- ・提出された教職学習個人誌は、教職実践演習実施報告書『学びの専門職をめざして—教職課程の意味を問い直す学生たち—』等に掲載され、公刊されることで、すべての人に公開されることになっている。

○なぜ学習個人誌(学習自叙伝)か？

- ・大学での成績評点ではなく、大学で学んだ中身を問う採用者。
- ・充実した体験をしていながら、その意味を伝えられない学生。
- ・自分が取り組んできたことを振り返り、その意味を問い直し、ライフストーリーの中に位置づけ直すことの重要性。
- ・そこで、同じ課程の学生集団でありながら、その集団内の異質性を高める装置をカリキュラムに埋め込むことで、自分が取り組んできたことの意味を、同じ経験を共有していない他者に繰り返し伝える機会を保障している。

○学習の出発点としての 協働探究プロジェクト

- ・本学部の教員養成カリキュラムでは、例えば前期の前半（4～5月）に異コース異学年のチームで公教育の課題について協働探究を行うサイクルが 2008 年度入学生から毎年繰り返されている。
- ・チーム内のメンバー一人ひとりが別々の資料と経験を手がかりにしなが互いの意見を突き合わせ、そこからチームで共通のテーマを立て、チームとしてどのような考察を行うかを議論し、それをチーム レポートにまとめてチーム外のメンバーに報告することが、全コースの学生の必修課題となっている。

(3) 島根大学の事例—ポートフォリオ評価を中心に—

富安慎吾氏（島根大学）には、島根大学独自のポートフォリオ評価である「プロファイルシート」を中心に報告いただいた。その概要は次の通りである。

○プロファイルシート・システムの特徴

- ・自己／他者／客観的評価の蓄積を行うシステムで、学生の成果物については蓄積していない。
- ・教育実習／教職実践演習の成果物等は紙媒体のポートフォリオにまとめている。
- ・自己評価としては数値・自由記述が、客観的評価としては数値（GPA 等）が、他者

評価 としては、記述・面談が用いられる。

- ・面談は、学生が入力した自己評価を指導教員が参照し、評価としてコメントを記述する。客観的評価とともに面談を行い、今後の学修計画を立てる。

○教師力 10 の力の設定

学校理解：学習者理解 教科基礎知識・技能 授業実践 リーダーシップ・協力
社会参加：コミュニケーション 探求力 教師像・倫理 リテラシー

○教職実践演習（4年次）

プロフィールシート説明会兼教職実践演習第1回

教職実践演習第2～4回（学年全体での実施）

取り組み1 他専攻の学生に自分の学修の履歴を話す

取り組み2 教育的課題について討議を行う

教職実践演習第5～15回（専攻・コースでの実施）

（4）他大学におけるポートフォリオ・システムの事例

早川楽氏（アンザス・インターナショナル株式会社）からは、同社が開発・運用に関わった下記のポートフォリオ・システムの事例について、報告があった。

①慶應義塾ニューヨーク学院（高等部）「KANYOS」

活用方法

- ・成績・出欠以外の各種活動記録などを記入。
- ・記入された記録は、教職員・生徒本人・保護者が共有。
- ・日々の生徒指導の情報として活用。
- ・「がんばり」の見える化。保護者の評判も非常に良い。
- ・慶應義塾への学内進学の際の評価対象。

②大阪大学「留学ポートフォリオ」

特徴

- ・短期留学プログラム向けのポートフォリオ・システムとして開発。
- ・教職員が設定した課題に対して学生が成果をアップロード。
- ・学生が海外留学中の学びをオンラインで共有。

ねらい

- ・学びの場の拡大。海外の大学だけでなく、大学間連携や高大連携など、学びの場が拡大している。
- ・インターンシップや企業との共同研究でも活用を目指す。
- ・教育の質保証と単位認定の問題。これまでは送り出し教育機関にお任せ。

③大手前大学 就職活動ポートフォリオ「就カツくん」

特徴

- ・職員だけでなく、学生が自らデータ登録。
- ・学生が就職活動の現場付近で記憶が薄れないうちに記録。
- ・学生が自分の就職活動を一元管理し、自分の活動を振り返り、行動に移すためのシステム。
- ・他者に共有しても良い情報は共有できるシステム。

学生の変化（現場の声）

- ・学生自身が就活を振り返ることができる。
- ・就活状況を整理し振り返ることで、当事者意識が強くなり自主性が育つ。
- ・目標達成ステップの明確化。
- ・カウンセリングによるフィードバックがやる気に繋がる。
- ・就活を記録すると、面談時にそれを共有したカウンセラーからフィードバックやアドバイスをもらえることで、やる気につながる。

○現在の e-Portfolio の課題

- ・学び支援の限界：評価中心になりがちで、やらされている感が強い。学生一人ひとりの学びのプロセスをきめ細かく支援するには教員の積極的な関与が不可欠。
- ・データ収集の限界：ポートフォリオへの入力作業が学習者の負担になっているケースがある。ポートフォリオを活用が学びのプロセスそのものに組み込まれていることが理想。
- ・データ蓄積の限界：学習履歴・学習成果は固定化されたデータではなく、本来データベースでは扱うことが難しい。NoSQL など新たなテクノロジーの活用が必要。
- ・データ処理の限界：Word/PDF のレポートを大量に収集しても処理ができない。教職員が人手で処理するには限界がある。教育ビッグデータ・EDM (Educational Data Mining) の活用による、自動処理や見える化を進めることが必要。

○次に求められる e-Portfolio とは？

- ・ユビキタスコンピューティング：「いつでも、どこでも」使えるものにモバイル端末の活用。
- ・学習記録データの細粒化：学習履歴データを柔軟かつ綿密に収集。小さなデータを継続的かつ頻繁に収集。
- ・教育ビッグデータ/Learning Analytics による分析：データ処理により、学習フィードバックの自動化。
- ・情報のオープン化：学習者同士、教職員、保護者や外部第三者も含めて広く評価し合い、学び合う。

(間瀬茂夫*・森田愛子・吉田成章)

IV 研究の成果と今後の課題

1. 教員免許ポートフォリオの改善

以上のような検討を経て、本学の教員免許ポートフォリオおよび「教職実践演習」の今後のあり方について、改善の方向性をまとめた。まず、前者については次の通りである。

①教員免許ポートフォリオの「実質化」 現在の教員免許ポートフォリオ・システムそのものの否定は現段階で行うべきではない。また、ウェブ・システムの大幅な改修には、大きな経費と時間を要するので、そのことを前提としない改善の方向、すなわち教員免許ポートフォリオの「実質化」に知恵を絞るべきである。

②ポートフォリオの実物化 その第一は、実物によるポートフォリオの作成である。学生は、レポート等の評価材、そのほか自分が必要と思われる学習成果の実物をファイリングしていくことを基本とすべきではないか。

③抽出ポートフォリオの作成 たくさん蓄積された評価材やそのほかの学習成果物を持ち

運ぶことは困難で、むしろ実質化や活用の妨げとなる。したがって、持ち運び可能な量の抽出ポートフォリオを作成するべきではないか。

④授業における教員免許ポートフォリオの教授 抽出ポートフォリオを作成するには、そのことの意義や機能を学生が理解している必要がある。そのための学習の機会、正規の授業の中で確保されるべきであり、現在ある教職系や実習系、教科教育系の授業科目の授業内容として組み込まれるべきではないか。

⑤カリキュラムにおける抽出ポートフォリオの活用 抽出ポートフォリオは教員とのコミュニケーションの中で活用されることで教育評価としての診断的機能、形成的機能を果たす。そのための機会としては、「教職実践演習」の他に、教科教育系授業、教育実習の事前事後指導、附属学校教員との面談、卒業論文指導教員との面談など、さまざまなものがあるのではないか。

⑥ウェブ・システムの改修1＝ウェブ・システムの簡素化 ポートフォリオが実物を基本とするなら、ウェブ・システムにおける評価材の蓄積は、基準ごとに評価材やそのほかの課題を保存することを中心とし、授業ごとの課題の設定などは省略してもよいのではないか。また、学生のふりかえりの記述も規準1から4、規準5から7、規準8とまとめて記述する形でもよいのではないか。

⑦ウェブ・システムの改修2＝ふりかえりの電子化 現状は、ふりかえりはPDF形式のファイルで保存され、多くの学生の自己評価の数値とコメントおよび教員によるレベル判定の一覧性に欠ける。また、教育効果を検証するにあたり、ふりかえりのコメントを丹念に分析するためには、改めて電子テキスト化する必要がある。システムの改修についてはさまざまなことが必要であるが、個人ごとのレベル判定との優先順位は、この部分の改善に置かれるべきではないか。

2. 「教職実践演習」の改善

「教職実践演習」については、本学における来年度からのクォーター制の本格導入に伴って、「教職実践演習」の実施条件は、これまでとは異なってくることが予想される。

- ・来年度以降下記のような条件の変更があり、対応が求められる。
- ・今後の全体的な方向としては、効率化を行いながら、ポートフォリオ評価の実質化に向かう。
- ・月曜日5コマ同時開講（今年度18クラス）
- ・教室確保の困難さ（来年度同時に確保できる教室数現時点で最大16教室）
- ・非常勤講師確保の困難さ（今年度13名）

こうした条件の変更にも対応しながら、来年度以降の「教職実践演習」およびそれに連なる教職系授業科目について、下記のような改善を行うことを提案・計画した。

①対応の方向

- ・非常勤講師部分の合同クラス化
- ・教科別のクラス規模の規準を30名程度から40名程度とし、クラス編成を見直す。
- ・非常勤講師担当部分の合同クラスは、50名程度とし、非常勤講師の人数に合わせて調整する。
- ・今年度の実績をもとに試算すると、合計401名の受講者について、教科別18クラス

で行っていたが、それを教科別については、16 クラス、合同クラスは 12 クラスでの開講となる。

②来年度の「教職実践演習」の授業計画の改善

変更点

- ・ 2 回目と 15 回目をポートフォリオの作成に充て、基準 8 の内容とする。
- ・ 基準 5 と基準 6 を合同化し、基準 7 を独立にする。
- ・ ふりかえり&フォローアップ方式は、原則として維持する。
- ・ 非常勤講師の担当授業を 2 回（基準 5・6 と基準 7）とする。

授業計画（シラバス）

- 1) 第 1 回 オリエンテーション（教科別）
- 2) 第 2～4 回 基準 5～8 のふりかえり
第 2 回 抽出ポートフォリオの作成に向けて（2 会場で説明）
第 3 回 基準 5・6 のふりかえり
第 4 回 基準 7・基準 8 のふりかえり
- 3) 第 5～6 回 基準 5～7 のフォローアップ（非常勤講師）
第 5 回 基準 5・6 の講話「生徒理解と学級経営」（合同クラス）
第 6 回 基準 7 の講話「教育公務員と学校」（合同クラス）
 - ・ 非常勤講師への事前質問はなし。これまでの質問からピックアップして提示する。
- 4) 第 7～14 回 基準 1～4 のふりかえりとフォローアップ（各教科）
 - ・ 各教科での実施。ポートフォリオの作成を推奨。
- 5) 第 15 回 ポートフォリオの完成（基準 8 フォローアップ）（各教科）
第 15 回 抽出ポートフォリオの完成「私にとっての教師とは」を、抽出ポートフォリオの目次および「はじめに」として書き、抽出ポートフォリオを完成させる。また、グループ内で個人の発表を行わせるとともに、代表者に発表させる。

③「教職実践演習」における評価の改善

- ・ 教職実践演習期間中のワークシートおよび作成提出物は、実物の回収・返却方式によって全てのチェック・評価を行い、e ポートフォリオへのアップロードは自由選択とする。
- ・ e ポートフォリオは、4 年前期までのものを参照する際に活用する。
- ・ 学生によるレベル判定とチェックシートは、従来通り基準ごととする。
- ・ 基準 5～7 のふりかえり時のまとめ、フォローアップ時のまとめにおける自由記述は、要検討。

④3 年次までの教職系授業科目における改善

- ・ 新入生への全体的な指導としては、特に変更はない。
- ・ 2 年生、3 年生については、教職科目、教科教育科目、教育実習指導でなるべく e ポートフォリオに言及し、授業における学習内容としていく。
- ・ 教職科目、教科教育科目、教育実習指導との連携の可能性を検討する。
- ・ 3 年生の教育実習に実物ポートフォリオを持って行けないか、実習部会と検討する。

（間瀬茂夫*・竹下俊治・山崎敬人・草原和博・森田愛子・吉田成章）